



#36

平行無限の
グランドクロス

著・藍澤たすく

画・かもめ遊羽

「くそっ！ 開かない！」

「全然動かないわ！」

「ちくしょう！ 一体どうなってるんだ！」

俺の目の前で2人の少年と1人の少女が苛立たしげに部屋のドアを叩いている。

灰色の部屋のドアはびくりとも動かない。

おそらく外からしか開けられないようになってきているのだろう。

無機質な部屋には窓もなく、薄暗い蛍光灯がひとつぼんやりと点いているのみだ。

俺達4人は突然この部屋に閉じ込められた。

誰一人面識があるわけでもない。

何の共通項があるわけでもない。

しかし4人とも気がついた時にはこの密室に閉じ込められていたというわけだ。

「くそっ！ 何で俺たちが閉じ込められなきゃなんねーんだよ！」

赤毛で短髪の少年がさらに勢いよくドアを蹴り上げた。

筋肉質な体から練り出された会心の一撃だったが、やはりドアは微塵も動く気配を見せない。

「もう、あたし達、ここから出られないのかしら……」

「そ、そんなことないよ……き、きつとどこかから出られるはずだよ……」

銀髪の少女が、がつくりと項垂れてその場に座り込んでしまう。

それを見たメガネのやせ男が何かを取り繕うように励ましているが、自身の表情にも不安の色がありありと浮かんでいる。

一体、誰が、何のために、こんなことを、か……。

（俺は知っている……）

そう、この4人の中で俺だけが、こんなことをした奴の目的を知っている。判っている。

なぜ俺だけがそれを知り得るのか。

それは、俺が異能鑑定者だからだ。

異能者の持つ異能を瞬時に見抜く。それが俺の異能だ。

そして、ここにいる4人とも、本人に自覚があるかどうかは別として、すべて異能の持ち主だ。おそらくその異能が邪魔な組織なりなんなりかが、俺達をここに閉じ込めて……抹殺するつもりなのだろう。

（そんなことさせるかってんだよ……！）

俺は赤毛の男に焦点を合わせた。誰かこの部屋を脱出できる異能を、必ず持っているはずだ。おれは期待を込めて鑑定する。

工藤恭一。

所有異能…半径5メートル以内の物をすべて瞬時に任意の場所へレポートできる。

「キターーーーーー!!」

俺は思わず絶叫してしまう。

なんだよ、こいつの異能を使えば一発でここから脱出できるじゃんよ!

突然大声を上げた俺を3人が訝しげに見つめているが、構わずに俺は鑑定を続ける。工藤の異能の発動条件は……。

発動条件…惑星直列が起きている時に限り使用できる。

「なんじゃそりゃああああ!!」

ほんとになんだよ、それ! 次の惑星直列って何百年後だよ! こいつが生きてる間には1

回も来ねえじゃんかよ!

あ、でも「眠れる異能」ってちよつとかつこよくね? ……って言ってる場合かー!

「あの……キミ大丈夫? さっきからいきなり大声出したり……地団太踏んだり……情緒不安

定だよ? 気持ちには判るけど、もう少し冷静にここから出る方法をみんなで考えよ? ね?」

銀髪の少女が心配そうな顔でこちらに話しかけてくる。

考えてるっちゅうねん! 今、このメンバーの中で俺が一番真剣に脱出方法を考えてるっちゅうねん!

「あ、ああ、すまん。ちよつと取り乱しただけだ……もう、大丈夫。大丈夫だから……」

しかし表面上は平静を装って、俺は少女にそう応える。

少女はまだ心配そうな顔でこちらを見つめていたが、やがて「そう? 本当?」などと眩しなながらまたドアの方に戻って行った。

俺は気を取り直してメガネのガリ男の鑑定にかかると。なんとかこいつの能力が脱出につながる物であればいいのだが……。

見田信一郎。

所有異能…惑星直列を起こせる。

「マジかーーーーー!?!」

あまりの展開に俺はまた大声を上げてしまった。

向こうの方から「あの子はもうだめね……」「俺達だけで脱出方法を考えようぜ」「そうだと

ね……」などと諦めきつた声が聞こえるが、俺は意に介さない。

この見田と工藤の異能を組み合わせれば一気にこの部屋から脱出可能じゃねえか！
俺はいそいそと鑑定を進める。

発動条件…性的興奮が極限まで高まった時。

「なんじゃそりゃああああ!!」

俺は思わず見田につかみかかる。

「なんだよ、その発動条件は！ お前がエロ本見るたびに惑星直列が起こってるとでも言うのかよおおお！」

「え……グ、グランドクロス？ 一体、何言ってるんだい、キミは……？」

「おい、お前！ マジでちよつと落ち着けよ！ こつちは真剣に脱出方法を考えてるんだからな！」

見田に掴みかかった俺を工藤が無理やり引きはがす。

「はあはあはあ……」

思わず激昂してしまっただが、やはりここは見田の異能を発動させるしか道はなさそうだとすれば……。

「すまん。ちよつとパンツを見せてくれないか？」

「……はあ？」

俺のもつとも冴えたひとつの提案に、銀髪少女は露骨に嫌な表情を見せる。

「いや、俺にはなく、こいつに見せるだけでいいんだ。頼む！ ちよつとの間だけでいいから！」

「はあああ？」

少女がスカートの前をぎゅつと押さえ、汚物でも見るような視線を投げかけてきた。

工藤と見田も蔑んだ目でこちらを見つめている。

「ち、違う！ そういう意味じゃないんだ！ これはこの部屋を脱出するためのぐわあつ！」
突然、目の前で火花が散った。

「こ、この変態……!!」

それは銀髪少女が俺の横つ面を思いつきりビンタしたせいで起こった火花だった。

「ちよつとこいつマジやばいな。少し眠らせとくか」

工藤が指をポキポキと鳴らしながら近づいてくる。

「い、いや、本当に違うんだって。これは脱出うぼあつ!」

工藤の頑強な拳が俺の鳩尾にめり込んだ。あまりの痛みに俺は悶絶する。

こ、こいつボクシングでもやってるんじゃないか……？ 五臓六腑がばらばらに四散するよ

うな鈍い痛み思わず意識が遠くなってくる。

そ、そうだ、まだこいつの異能を鑑定していなかった……。

俺は遠ざかる意識を必死に繋ぎ止めながら少女に視線を向ける。

あいかわみほ
相川美穂。

所有異能…時間を巻き戻すことができる。

「は、発動条件は………?」

俺は最後の力を振り絞って鑑定する。アナライズ

発動条件…自分を辱めようとした変態が目の前でポコポコにされた時。

「な、なんだよ……それ……それ……それ……それ……」

そこまで考えて、俺の視界も、意識も真っ黒に塗りつぶされていった……。



俺達4人は突然この部屋に閉じ込められた。

誰一人面識があるわけでもない。

何の共通項があるわけでもない。

しかし4人とも気がついた時にはこの密室に閉じ込められていたというわけだ……。

おしまい